本興寺だより

令和六年　八　月
第二六〇号

「我（仏）は　常に此（ここ）にあって決して滅することはない。巧みな手だてを用いて　死んだり　或いはずっと死なない姿を示しているだけである。」
（法華経　如来寿量品第十六）

パリのオリンピックが始まりました。コロナの影響で、東京オリンピックから三年での開催です。一年の早まりが、「あっという間にまたオリンピックが来た」と感じます。月日の流れは、本当は急流を下る水よりも早いのかもしれません。

オリンピックの競技や選手を見ていると、悲喜こもごも。皆一流選手でありながら、実力が十分発揮できる選手もいれば、そうでない選手もいます。

努力や精神的なプレッシャーだけでは片づけられない、「運」もあります。人の人生も同じです。

「運命」とは、人の意思を越えてやってくる幸不幸のめぐり逢いだと云われますが、運命は自分の命を自分で運び、自分の道を開くことでもあります。

運の字の左の偏、「シンニュウ」は道を表わします。人は一人で生きるのではなく、他人と助け合って連なって生きるから、「連」の字が中にあるのです。また「運」という字の車に掛けてある覆（おお）いを取ると「連」になります。人生はオープンカーに乗るような、太陽が輝く良い日だけではありません。車に覆いがあるように、風雨の悪条件の中でも、幌（ほろ）の覆いをつくり、心がびしょ濡れにならないように、車が停滞しないように、常に前進（前向き）して生きることを表してもいるのです。

仏様は運命を転換させる要素の一つに、神秘の力があると云われています。神秘の力とは、目に見えないご神仏のご加護と、今は亡きご先祖の力なのです。この二つは、自分の運勢をより良い方向に導く車の両輪なのです。

神仏への感謝と敬虔な祈りの心を保つことがご加護を頂けることにつながると説かれます。ご先祖の御霊へ生前と変わらぬ感謝とご供養の想いが大切なのです。

冒頭の文のように、仏様は決して滅することはなく、悠久の命を持っていると述べられています。仏の命の分霊を頂いている私達（人間）も魂は滅することはないのだと教えています。

人間の本体は「霊体」なのだと。それを今世、生まれた肉体の身が本当の自分だと錯覚するから生老病死をはじめとする苦悩が無くならないのだと。

生きているこの身が全てであり自身が単独で生きているのだと考えるから、それを失う恐れや執着、苦悩の気持ちが増すのだと。

形の上では生者と死者、目に見える人と見えない人の違いはあれども、魂の世界では共に生きていることを気付けと云われます。

まもなく八月のお盆を迎えますが、ご先祖の御霊を迎え、送る行事には、生前と同じく、近況を語り合い、死者と生者との垣根を越えて、共に喜び感謝する気持ちが強くありました。

お盆の時期に多い花火大会にしても、亡き御霊への鎮魂の祈りと供養の気持ちから起こったものです。

日本最古と云われる隅田川花火大会も、いまでは百万人以上が見学されます。東日本大震災の後、その犠牲者の慰霊のために、福島をはじめ毎年八月のお盆に犠牲者の慰霊と鎮魂のために花火大会を新たに毎年開催されたところもあります。

八月十三日の迎え火、十六日の送り火も、京都五山の送り火も、皆慰霊と供養の気持ちがあります。火には不浄なものを焼き尽くし、闇を照らし、鎮魂の意味があるからです。

人は死を自覚し始めた時、何が脳裏を横切るのでしょうか？人それぞれとはいいながら、過去の回想や、郷愁の思い、家族や友への想い、祈りを残して何時かは旅立ちます。

大切な亡き家族、友人は皆、万感の想いを残してあの世へ逝かれています。死してもその気持ちは変わらず御霊が持っているのです。残せし家族の行く末への心配、願いが高じて、御霊の心が暗く曇ることもあるのです。燈明の智慧の光は、御霊の心に安らぎの光を当てることにもなるのです。

日蓮聖人は「日は赫赫（かくかく）たり　月は明明（めいめい）たり」と云われています。「赫」には聖なる火で身を清める意味があり、「明」は窓から月の光が差し込み、暗闇が解放されて物事が明らかになることです。どちらも神仏の力を現しています。何時でも見守ってくれている力があり、それを願っている先祖の御霊があるのです。

辛い時は人はうつむくことが多くなりますが、天を仰げば、分厚い雲があったとしてもその上に必ず日月の光明が差して輝いています。飛行機が雲の上に上昇した時に見られるように。それは全てを包み込み、新たな力を与えてくれる恵みの光なのです。己の心の曇りが光を遮るのだと云われます。

神仏の世界とこの世も、ご先祖の逝かれたあの世とこの世も、双方とも霊の世界は心の対面通行なのです。人は、ともすればこの世から向こうの世界への一方通行だと思い込みがちですが、仏様はそうではないのだと教えています。

「神仏やご先祖の御霊は存在するか？」と問われて「さあどうかな？」と思いつつお参りする人も多いと思われますが、私達の信じる心の深さに応じた分しか向こうの世界に伝わらないということです。

私達は、大切な亡き人が「もっと生きたかった今」という時を生きています。

いつでも亡き人の想いを感じ、受け止め、生死を越えて今も共に生きているのだということを忘れず、自分の供養の気持ちを確かめるのがお盆でもあると思います。合掌

本興寺住職　中　谷　聰　秀